

『神秘の記憶』

伊藤
龍弥

日本文芸楊子三

ひとりでお山のほうへ行ってはだめ

みだれたつ樹々が、ふいに記憶とかさなった。日光をさえぎる広葉樹の葉、水気をふくんだ苔につつまれた樹皮の鮮やかさ、くさり落ちた枝葉にこもる熱とにおい。とびまわる羽虫が入らないように、口をすぼめて息をすっていた。現在のじぶんの眼にうつるとりどりの植物を見ながら、同時に記憶としてじぶんのなかに存在する風景を見ている。樹の幹をつたう黒々とした影、羊歯植物ののっぺりとした緑がたしかに見えていた。目の前にないそれらに目をとられていると、となりからいはずの母の声も聞こえる。いまよりもずいぶん若い。

「ひとりでお山のほうへ行ってはだめ」

あの頃は、そうやってだれかが、お山はあぶないから、かえってこられなくなるから、と口にだすたび、とおくで稜線をかたちづくる山の木々がひとまわりずつ成長してゆくように見えていた。それをくり返して膨れあがっていった山はいかにも不気味で、万が一にも近づかないように気をつけていたのだった。そのはずなのに、ひとつだけ、かさなる葉の陰りに惹かれるようにして山中に踏み入った記憶を持っている。

それはごく幼いころの記憶だった。その時に自分が幼稚園に通っていたのか、小学校に通っていたのかすら

もまだかではない。両親が出かけたのを見送ってから、父がいつも車庫の端に置いていた園芸用の鎌をにぎり、家に面するアスファルトで舗装された車道をすすんで山にむかった。日差しのつよい日だった。

正確な距離はもはやわからない。それでもずいぶん歩いたのはたしかだった。やがてその道がのぼり坂に変わり、路肩へ被さる枝葉が増えてくるあたりになると首筋を汗がたついていた。毛穴がふつふつとひらいて呼吸をくりかえす。だんだんとくちびるに熱がまつわる。そうやって一人で歩くのは初めてのことだった。自分が歩く理由もわからないままに歩きつづけていた。

やがて道をそれ、山の中にはいった。その場所を選んだ理由はやはり覚えていなかった。ただその時に感じたりこわい、という感覚と、曖昧な風景だけが一括りになって身の内にあった。

この風景は記憶が掘りおこされるたびに形を変えた。今度は、一層色濃く緑が映えている。液体にも見える黒い陰影のなかで葉の濃緑色が浮遊しているように見えた。視線を向けていると、身体がそれらの一部としてとり込まれてしまう気がする。荒い呼吸音だけがくり返し再生されて耳にとどいている。山にいるべき虫や鳥の音は聞こえてこないのだった。

かつてに手が動いて、身のまわりでのび上がっている雑草をつかむ。記憶のなかの身体は、それを思いかえしている自分の意思に関係なく動いた。丈高い草の茎にもっている鎌の刃を押しつけると、ぐいぐい力をいれ

て刈る。刃に反射するひかりがつめたくて指先がかじかんでいる。鎌を持つ手がかすかにふるえる。刈りきれなかった雑草の葉末が身体にふれるたび、その箇所筋肉がこわばるのをやけにはっきりと知覚している。

つぎつぎに草を刈ってゆく身体の中かで、自分は どうしてそんなことをしていたのだろうと考える。母にはよく「おまえは怖がりな子だねえ」とからかわれていたはずだった。ひとり山に入るなど考えたこともなかった。それなのに、記憶にある自分は雑草をふみ折り、刈りすてながら前にすすんでゆく。歩みをすすめる。その運動には、過去の自分の意思も、現在の自分の意思もまったく関わっていないのだった。

そうしていつの間にか、密生した草むらの奥に立つだけかを見ている。

ふ、と草の汁のおいがのぼった。

「また」

太一の手に握られたスマートフォンがちいさくふるえていた。二〇分ほど前とまったく等しい振動にこころがざわめく。電話の発信元である友人の屈託のない笑みがよぎってゆく。彼のめぐまれた声量が、空間を越えて耳にまでひびく気がした。無数の木々に囲まれ、人影ひとつ見えないようなこの土地にあつても意識される人とのつながりがいとわしかった。

都内の大学にほど近いアパートに住む彼とは、入学したばかりのころから付き合ひがあつた。おなじ文芸サークルに所属しており、講義での接点も多かったために彼から昼食に誘われるようになったのだった。

彼は朗らかで人懐こい性格から交友関係が広がつたが、不思議と太一のことを気にいつたようで、よく休日には自室に籠もりがちな太一をひっぱり出して遊びに出かけた。田舎の出身で人混みをきらう太一を気づかつか、わざわざ客の少ない静かな食事処を見繕つてくれる彼のうしろを歩いた。しだいに、彼と本の感想や講義の相談を交わしながら過ごす時間が大学生活のほとんどを占めるようになったのだった。結局、いまに至るまでその関係はつづいている。

側面のボタンを指でさぐりあてて、電話を切つた。いつの間にか脂汗をかいていたことを風にぬぐわれて気づく。もうお盆が近い時期であるわりには涼しい日だった。土地柄なのかもしれない。日本海までそう距離のない場所に位置する山中は、さほど標高がなくとも風通しがよく空気が澄んでいた。

太一はいま、あの山の記憶とおなじ場所にいる。

大学の夏休みを利用して帰省していた。去年のお盆は面倒がつて東京で過ごしたから、今年は両親が心配して七月のうちから電話をかけてきていた。また、面倒だし夜行バス代がもったいないから、と断ろうかとも思ったが、やめた。最近は大学の友人が就職のはなしばかりするようになっていたという現実的な事情もあったが、両親からの電話にでた前日の夜、ひさしぶりに山の夢をみたのがきっかけて実家まで帰ってみる気になっていたのだった。

いまになって見ると身体をとり囲んでいる樹々はいたって普通の広葉樹で、記憶に染みつくおそろしい印象とはかけ離れている。頭のうえでは盛期を迎えた蝉の鳴き声がうるさくひびき、息苦しいほどに感じていた草いきれのおいも樹間をぬける風にはらわれてむしろ心地よく香った。幼いころから思い出しつづけていた記憶には、やはり夢や空想がまじり込んでいたらしかった。

太一の目の前には一体の道祖神があった。高さ一メートルほどの、前面が平たく荒削りされた岩を背にして、ひとがたが台座のうえに乗っている。背面の岩にご信仰がきざまれるでもなく、木組みで囲って風雨の侵食をよけるでもなく、ただひとがたが据えられている。この道祖神だけは記憶のままの姿かたちでそこにあった。

夢からぬけでるようにして据えられていた。

たしかにあの日もこの道祖神をみつつけていたのだった。草の汁と自分の汗で皮膚をぬらして、朦朧とした意識のまま分け入った藪のさきはこの神像があった。道祖神というものを見たのはそのときがはじめてだった。みちの神。辻に祀られ、外からやってくる災いを押しとどめるよう祈られる、村落のまもり神。当時はそんなことも知らなかった。

神像に焦点が合わさって思わず足をとめたときの、狭められた視界をそのまま記憶している。顔も彫り込まれていない、頭と胴体だけがかたどられた石の塊を見て、どうしてか、すぐにそれが神様の類いだと気づいたのだった。

無意識に緊張していた視界が、しだいに石づくりの胴体下部、すぼまった首もとを覆う苔をとらえる。そうして注意が頭部にいたったとき、道祖神の、彫られていないはずの瞳がこちらを見つめているような気がして、やっと我に返った。自分がどうしてこんなところにいるのかがわからない。わからない、という思考だけが反芻してしばらく何も考えられずにいた。茫然としたまま何分か経って、だんだんと混乱がおさまってきたところで、やっと母に「ひとりでお山のほうへいってほだめ」と言われていたのを思い出した。

不思議と、山を出たあとのことははっきりと覚えていて。夢中で雑草を刈りすてるうちにできていた道をひ

き返し、アスファルトを踏むと同時に家までの道を駆けた。息を切らして家に帰りつくくと、買い物に出かけたはずの両親はまだもどっていないかった。

しばらく玄関でぼうっとしていたが、車庫のほうから両親の車のエンジン音がするのに気づいて、急いで風呂場にむかった。熱めのシャワーをあびてリビングに出ると、両親は冷蔵庫にスーパーで買ってきた肉、野菜、冷凍食品など一週間分の食料品を詰めているところだった。おかえり、と声をかけてから、ソファに座って父にわたされたぶどう味の棒アイスを齧った。

そのころになると、つい先ほどまで感じていたはずの焦りのような衝動はうすれ、山中に落としてきたらしい鎌のことが気にかかっていた。数日のうちは鎌を勝手に持ち出して無くしてしまったことがばれて父親に叱られるのではないかとおびえていたが、結局なにも言われることはなかったのだ。

その日このあたりに落としたはずの鎌は、もう朽ちたか、土に埋もれてしまったようだった。木製の柄はともかく、鉄かなにかで出来ている刃は十年や二十年で土として崩れるとは思えないから、もしかすると通りすがった鳥獣が持ち去ったのかもしれないかった。

愚かな人間の子どもが落とした鎌を、化け狸と大鴉が喧嘩をしながら取りあう姿を想像する。ながく身のうちに抱えていたあの記憶が現実の景色にとつて変わられるのがどうも名残惜しい気がして、わざと非現実的な

ことを考えていた。

ふるびた鎌を中心に、二匹が向かいあう。化け狸が人間臭く前脚をふり上げて威嚇する。そのまわりを大鴉はがあがあ鳴きながらとびはねる。興奮した化け狸は縞つきの尻尾を盛んにふりたてる。その目をふち取る黒い毛が化粧のように見えている。翼をひろげた大鴉の黒い羽根が数枚ぬけて散り、宙で回転しながら地面へ落ちてゆく。ひら、ひら。

しかし、化け狸はそもそも狸を動物園の柵のなかにいるものしか見たことがないからどこか姿が曖昧だった。そもそも尻尾に縞があるのはアライグマだったかもしれない。それに鴉は光るものを集める習性があると聞いたことがあるから、非現実の空想とすらも言い切れないのだろうか。どうでもいい考えが浮かんできて、すぐに思考が現実へとひきもどされる。所詮は安易な妄想に過ぎないのだった。どうにか非現実を思い描こうと意識したところで、意味を持たない風景だけが数秒浮かんで消える。それがくり返されるばかりであの記憶のように現実に見たものを塗りかえるようなことはおこらなかつた。

まだ昼過ぎだから鴉の声は聞こえていない。遠くのほうでちいさい生き物が草の根を分けて走る音を聞きながら考えていた。

そういえば、道祖神の周りの草は抜かれて濃い茶色の土が見えていた。見れば周囲の草花も短く刈りそろえ

られている。車道をそれてからここまでの敷も人が歩ける程度には整えられていたから、いまはだれかの所有地にもなっているのかもしれない。

そう思っていると、声が聞こえた。

おうい

ふり返ると、太一がぬけてきた道にはグレーの作業服を着込んだ老人が立っていた。腕には雑巾やブラシなどを入れた青いポリバケツを提げている。軍手をつけているから、偶然ここにいるわけではないのがわかる。この場所を管理しているらしかった。

とつぎに、こんにちは、と挨拶をすると、老人はかぶっていた紺のキャップの鰐をすこし持ちあげて、はいこんにちは、と笑った。笑うとゆるやかに目が細まり、年齢も相まって能楽の翁面を着けているようにも見える。

「きみ、地元の子？」

発せられたのは、容姿に反して若々しい声だった。水気を失った皮の垂れる喉をふるわせて音を出している

とは思えないほどつよい張りがあった。夏の昼間に山中で作業をしようというのだから案外お年寄りという年齢ではないのかもしれない。実家はこっちなんですけど、大学が東京でいまはお盆の帰省をしているんです、とここにいる事情を説明する。それを聞いた老人はしばらく黙ったのち、なるほどねえ、と納得したようになりごちた。

「もしかして、入っちゃいけませんでしたか」

すこし不安になって問うと、老人は笑顔のままかぶりをふった。それがやはり翁面のように見える。細かいしわのきざまれた口がぼつかりとひらく。いやあ、おれ以外の人がここにいたのははじめてでさあ。それにずいぶん若いから、ますますお参りなんてしなそうでしょ？ ああ、いやいや感心してるんだよ。そんなに心配そうな顔じゃなくていい、すばらしいことだから。もちろん歓迎だよ。

話すうち、老人は田中と名乗った。田中さんは、市の地域振興課に雇われてこの地域と両隣の集落ちかくに点在する祠、鳥居、道祖神などの管理を行っているのだという。管理と言ってもこの通り雑草を刈ったり像の汚れを落したりする程度なんだけどね、と自嘲ぎみにこぼす。仕事にこだわりのあるたちなのか、このときばかりは笑顔もすこし歪んでいたように見えた。

よく話す人だった。最近、あまり人と話していなかったのかもしれない。太一の母方の祖母も、祖父が他界

してからは特別に用事がなくとも家の外に出て話し相手を探していたのを思い出していた。太一も会った筈にその長い話につきあっていたのだった。彼女が亡くなったのは、三年前だっただろうか。

そうやって過去のことを思いを巡らせている間も、田中さんの話はつづいていく。ここ以外の現場の作業最近の暑さ、反してこの場所の涼しさ、そして雇い主である市役所の地域出張所役員への愚痴。それらをよどみなく話し終えたところでやっと一息つき、すぐ気づいたように高い声をあげた。

「ああと、ごめんね。つい話し過ぎた。ここは二週間ぶりだからずいぶん雑草のびちゃってるし、そろそろ取りかからないと。あ、もしよければさ、手伝わない？」

田中さんが、青いポリバケツを掲げてみせる。表面に貼られた容量をしめすシールは白っぽく曝れているうえ、すり切れてほとんど読めなくなっている。ずいぶん長く使っているようだった。

「ああ、すみません。今日は母に早めに戻る言われてて」

誘いを断ると、田中さんはやはり笑顔のまま、ざんねん、と言った。あまり残念そうな声ではないような気がした。もし気が向いたらきてね、二、三日はここで作業してるから。

そう言いながら、ポリバケツの取っ手をもてあそんでくるくるとまわしている。そのなかでブラシ、虫除けスプレー、ステンレスの園芸スコップ、その他いくつかの道具が揺すぶられてうるさく音をたてている。見え

ていないが、きつとそのなかには草刈り用の鎌もある。金属同士がぶつかる甲高い音が連続してひびくのを聞いている。

ええ、ありがとうございます。もしかしたらお邪魔するかもしれません。

そう言ってこの日は山をでた。

道祖神がこちらを見ている。ないはずの目と視線が合わさっている。

全身の筋肉がこわばって動かない。試しに首を巡らそうとしても、無闇に力が入るばかりで正面を見つめつづけることしかできない。それなのに力が入りつづけて、ますます身体が固まる。ただ疲れがたまり、身体が重くなってゆく。どうしようとも逃れられないようだった。

足もとに生える草の葉末がふくらはぎのあたりにふれている。服は着ているはずなのに、素肌をなでる感覚がある。まるで水のなかに植わっているように、ゆつくりとゆれながら肌をふれている。

これは金縛りだ、と半覚醒の状態にある意識で思う。

田中さんと会ったあと、家に帰りついて眠るまでの記憶があった。ひさしぶりの帰郷で、気づかないうちに疲れていたのだろうか。眠りが浅いときに、脳の身体を操作する機能だけが目覚めずに金縛りにあうのだと聞いたことがあった。それでも、ベッドの上ではなく山のなかにいるのは不思議なことだった。

いつの間にか、自分の身体をどこからか見ている。太一の身体は、木の幹を背にする暗がりにつつま立っていた。ここでなにをしているのだろうか。自分の身体のことなのに、自分とは関係ないことのように考える。

見覚えのある道祖神があるのだから、ここはあの記憶の山であることは間違いない。現実に見た適度に日のひかりがさし込み、涼しく風のぬける日本海沿いの山ではない、幼いころに迷い入ったと思ひ込んでいたあの山だった。非現実として現実の風景に塗りがえられてしまったと思っていた記憶が、まだ消えずに自分のなかにあるのを意外に思った。

あの山の記憶は、思っているよりもはるかに深く自分に根ざしているらしい。昼間、現実に見たはずの山の姿はすでにうすれ、いま目の前にある緑色の群生に置き換わっていた。

身体はやはり微動だにせず、同じ場所に立ち尽くしている。

その姿がどこかおかしい。しばらく見つめて気づく。先ほど葉末になでられているように感じていたふくらはぎから下が、周囲と同じ緑色に覆われていた。よく見れば、足もとにあった下生えが脚を巻くようにして貼

りついている。線の細い無数のスギナ、葉縁の鋸歯が目立つヤマソテツ、メヒシバ、名もわからないササ類。それらの葉が隙間なく脚をつつんでいる。

それらをとり払ったところで金縛りにあっている身体は動かないのに、焦りがこみあげて辺りを見まわす。どうしよう。そうしている間も、脚にはゆっくりと植物が絡まっている。肉体のそとにそのまま、青臭いにおいが鼻腔にはいり込むを感じていた。

またふいに視界がうつる。こちらのほうへ向かって、だれかが歩いてくるのが見えた。なにか大きなものを肩に担いでいる。そのほとんどが緑に覆われた荷物は、太一と同じように植物につつまれた人間らしい。

その人は太一の身体に近づくと、担いでいる人間をおろした。それまでよく見えなかったが、来ているのはグレーの作業服だった。腕に提げていた青いポリバケツのなから鎌をとり出して脚にからむ植物を刈りだしたのは田中さんだった。

田中さんは、慣れた手つきで素早く草を刈ってゆく。

太一の脚を傷つけないよう、指で貼りついた葉を剥がしながら草の根本を切っている。それを田中さんの目で見ている。ぶつり、とまた茎が切れる。

茎を切る。ここ数日、夢見ごちちのまま過ごしている。田中さんに指示された場所にある雑草をぬいて、袋に入れる。丈が高く、邪魔なのは鎌で刈る。黙々とその作業をつづけていると、また意識がゆらぎそうになる。

「大丈夫？ 疲れてそうだけど」

田中さんが心配そうにこちらを見ている。平気です、と答えると、暑いから気をつけてね、と言ってまた草を刈りはじめる。

はじめて田中さんと会ってから七日がたっていた。

わずかな日数でも、日がな一緒に作業をしていたから随分と気が知れてきている。家にいても記憶にのこりつづける山が気になって、結局田中さんの仕事を手伝うようになったのだった。

朝、七時ごろに家からすこし離れた道路で待っていると、軽トラックに乗った田中さんがやってきて、作業現場に向かう。あの道祖神のまわりの草刈りは二日で終え、その後は他の現場を回った。

ちよつと手伝ってほしい仕事があるんだけど、と声をかけられたのは今日の朝だった。

え、草刈りじゃないんですか。と聞くと、うん、ちよつと違うんだけど、まあ似たようなものだからたぶん大丈夫だと思う。やってくれないかな。と歯切れ悪く言う。

なにをさせられるのだろうか、と思いつながらぼんやりとうなずいていた。

渡された鎌を持って、田中さんの前に道をつくりながら歩く。なにがあるわけでもない山のなかを進んでいた。うしろの田中さんは、大きな荷物を担いでいる。布で包まれたその荷物の中身に気づきながら先導していた。

あの、植物に包まれた人は誰なのだろう。そればかりを考えている。

「悪いね、こんなこと手伝わせて」

田中さんが背中越しに声をかけてくる。いえ、平気です。そう答えるしかない。

やがて、目的地についたのか止まるように言われる。田中さんは荷物をおろし、周辺の草を刈りはじめ、それを手伝っていると、田中さんが声をあげた。

「これねえ、おれの身体なんだよ」

田中さんの方を向くと、何事もなかったように草を刈っている。どういうことですか、と問うと、うーん説明が難しいんだけど、と言って黙る。

「ごめん、おれが話しはじめたのに。ちょっとうまい説明が思いつかないからさ。これ埋めるころには話すか

埋めるんですか。うん、埋めるよ。そう話したあと、田中さんは黙って草を刈りつづけた。

おれ、神隠しにあうためにこの仕事についたんだよね。別に自殺志願者ってわけじゃないから死ぬのは怖いんだけど、小さいころから幽霊でも、鬼でも、天狗でもなんでもいいから、いないはずの存在に別の世界へさらわれる妄想をよくしてた。

だってさ、この世にある場所ってどこでも地図に載ってるじゃない？しかも、最近はどこに行ったってスマートフォンで現在地がわかる。全部既知なんだよ。神秘も糞もない。

だからせめて、神隠しの噂があるここで働こうと思ったんだよ。

これが、二八歳のときね。

青年が木の根本に立っていた。

もう身体のひとつが植物に覆われていて、身動きがとれないように見える。

抵抗する気がないのか、やはり金縛りにあっているのか、青年は目をふせたまま身を委ねていた。やがて、

身体を囲うように身の丈を超える長さの茎がのびる。

完全に全身をつつまれた青年は、ふいに脱力したように倒れこんだ。その身体を、周囲の藪が重なるように覆い隠してゆく。

と、そこに老人が現れた。蒼白な顔に、びっしりと汗が浮かんでいる。優しげな顔をこわばらせ、倒れた青年の肉体をみつけると必死の表情で担ぎあげて走り去ってゆく。

目が覚めると、自室のベッドの上だった。

最近、よく同じ夢をみるようになっていた。夢の内容はほとんど田中さんから聞かされた話と同じものだから、原因は明らかだった。

田中さんの死体を埋めてから、彼には会っていない。どこかへ消えてしまったのか、まだ仕事をつづけているのかも分からなかった。

ふだんは意識してそのときのことを考えないようにしているが、それでもときおり別れ際の彼の言葉を思い出すことがある。

「むかしからこうしたかった」

その夜は、きまって山の夢を見る。

日芸文芸楊七三